我が町の水資源の“涵養”に感謝!!

◆研修地②◆沖縄県企業局「北谷浄水場」及び「海水淡水化センター」【１/30】

手前が沖縄県企業局海水淡水化センター。奥に見えるのが北谷浄水場

戦後、沖縄の人々にとって「基地」の問題には、「地下水」も含まれていたとのことである。

何でも、米軍が進駐してきた際に、良好な地下水がある場所に「基地」を建設。その上、やたらと汲み上げたため、地盤が沈下したこともあったそうだ。

そのため「沖縄返還」後には、一番に水資源の確保を余儀なくされ、「企業局」が組織され各地に浄水場やパイプラインなどを設置したとのことであった。

海水淡水化センターは、厳しい沖縄の水事情を緩和するため、水道水の安定供給を図ることを目的に施設の建設を平成５年度から着工し、平成８年度に完成。１日あたり４万㎥の水を造ることができる国内最大級（完成当時、国内最大、世界でも５番目の規模）の海水淡水化施設として稼働しています。

沖縄本島では、人口の増加や経済の発展、観光客の増加によって、益々、水の需要量が増えてきており、それに伴ってダムなどの水源開発を行ってきたが、それでも水の供給が追いつかず、たびたび水不足に悩まされていたらしい。

そこで県企業局が総事業費約347億円をかけ、無尽蔵にある沖縄の美しい海から水を造ることができる「海水淡水化施設」を建設し、気候や天気に左右されることなく、いつでも海水から真水を造ることができるようになった。

同施設は取水した海水を「半透膜」を通して真水にするもので、水の供給過程は北谷海岸沖合から海水を取水、２種類の「ろ過機」で汚れを取った後、逆浸透設備で淡水化したものに陸水と硬度調整し、沖縄市、北谷町、宜野湾市などに供給している。

県内では南北大東や粟国などで海水淡水化を行っているが、北谷淡水化施設は環境保護面にも配慮、県内の水需要は日量約40万トンで、うち３割を不安定な河川からの取水に頼っており、同施設の稼働は県内の水の安定供給に威力を発揮するものと期待されているとのことであった。

沖縄県企業局「北谷浄水場」及び「海水淡水化センター」の視察にあたっては、沖縄県民の「水」に関する思いが半端でないことが分かった。

同時に、氷川町の水事情のそれとは、かなり隔たりがあり、井戸水が豊富なうえ、上水道が敷設されている我が町の現状にありがたさを覚えた。

海水淡水化センターで説明を受ける

産業建設厚生常任委員会・調査報告（沖縄）

沖縄の「畳表」は、ほとんどが地元産!!

◆研修地①◆沖縄県うるま市「海の駅・あやはし館」及び「海の文化資料館」【１/29】

うるま市与那城地区にある海中道路。「道の駅あやはし」や文化資料館は、この中央部に位置する

うるま市は、沖縄本島中部に所在する市であり、具志川市、石川市、中頭郡勝連町・与那城町の２市２町が2005年（平成17年）４月１日に新設合併して発足した人口約12万の市である。

今回、産業建設厚生常任委員会・調査視察研修では、うるま市与那城「海の駅・あやはし館」と併設している沖縄の海運に関する資料などを展示してある「海の文化資料館」を視察した。

海の文化資料館となっているが、うるま市の資料館という意味合いが強い。

この「海の駅・あやはし館」は、与勝半島と平安座島を結ぶ4.7キロの海中道路の中央部にあり、うるま市の特産販売とバイキングレストラン、鮮魚コーナー、ファーストフードコーナーなどがあった。そのほか野外ステージも設けられていた。

海中道路の周辺では、この時期もサーフィン等を楽しむ若者がいたが、夏場には道路の両サイドは、全国からの若者で一杯になり、大変混雑するそうである。

この海中道路、「沖縄返還（1972年５月15日）」前の1970年（昭和45年）にアメリカの石油会社で、当時の石油メジャーの一つであるガルフ社（後にシェブロンに吸収合併）が国頭郡与那城町平安座島に進出することになり、島に「沖縄石油基地」を造ることになった際、地元住民が沖縄本島へのパイプライン建設時に道路建設を条件に付けたことでできたということであった。

ちなみに、この4.7キロの海中道路建設は、1971年（昭和46年）５月に着工し、翌年の４月22日に２車線の道路としてガルフ社の負担で完成した。完成した海中道路は1974年（昭和49年）、与那城村（当時）に無償譲渡され、村道となった。1991年（平成３年）には沖縄県道に昇格した。そして1999年（平成11年）に４車線化が完了した。

さらには、この石油基地の建設により、返還後は国からの交付金で地元の自治体は大変潤ったということである。

２階にある与勝半島の歴史・民族資料を集めた資料館は、琉球独特の「マーラン船」（中国のジャンクを原型とした船）をはじめ貴重な沖縄の海の自然、文化、海運にまつわる資料などが展示されており、照間（てるま）の「ビーグ」や海中道路の建設についての説明が展示されている。（沖縄では、「い草」のことを方言で「ビーグ」と言う）

照間の「ビーグ」とは、旧・与那城町の照間地区で取れる「い草」のことで、八代産のい草より少し茎のサイズが大きいもの。

照間集落では、150年～200年前に、このビーグ栽培が始まったと言われていますが、元々ビーグ栽培は、旧・勝連町の南風原集落で行われ、収穫されたビーグを乾燥させるのに適した照間浜で天日干しをしていたそうである。

当時の照間浜は野球ができるほど広く、夏は強い陽ざしで温められ、裸足で歩くことができないくらい熱かったそうです。そのため、収穫されたビーグを乾燥させるのに適した条件を備えている照間集落に南風原集落から生産地を移し、そこでビーグの栽培をはじめたとのことであった。

照間集落の圃場は、農薬を一切使っていないため、今でも小動物が生息しており、サギ科などの鳥がその餌を求めてやってくるそうで、この小動物やサギ科の鳥たちがビーグに取り巻く害虫や外来種などを食べ、ビーグの育成を手助けしているそうだ。

ビーグの生産者は、28名で高齢化が進み、後継者が少なくなってきている関係と、宅地化が進み、生産面積が減少しているということだった。

平成24年度の作付は、約９ヘクタールで約50トンの生産であり、この照間のビーグが沖縄全体の97パーセントを占めているとのことであった。

ビーグの植付けは、10～11月頃で、刈り取りは６～７月頃で、乾燥は現在では、乾燥機を利用している。

品質は、「特級」「１級」「２級」「３級」に分かれ、選別機を使いビーグの長さに応じて分けた後「ムスル（畳表）」を織ります。このとき、ビーグの長さで織機も変わるそうです。昔は、足踏式の織機が使われていたが、現在は、機械の織機が使われています。

ちなみに、説明をしてくださった資料館の学芸員の前田さんは、以前、八代地方に「い草」の研究のため視察に訪れたとのことでした。

当委員会では、現在、安価な中国産の「い草・畳表」の輸入により脅かされている八代地方の「イ産業」の何かしらの打開策を求めて、今回、うるま市（照間地区）を訪れたが、後継者不足の悩みこそ同じものであったが、照間地区のビーグが沖縄全体の97％のシェアを占めており、生産も追いつかない状況だとお聞きした。

また、沖縄の人々が地元産（少し茎のサイズが大きい「い草」）にこだわりをもっており、その辺りに八代産い草の今後の展望が開けるのではないでしょうか。

うるま市照間地区のビーグの栽培